

上海日本人学校虹橋校における学年経営の実践

前上海日本人学校虹橋校 教諭

福島県郡山市立富田小学校 教諭 高松 宏光

キーワード：在外教育施設，上海，虹橋校，学年経営

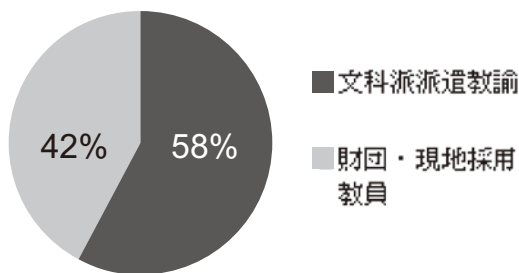
1. はじめに

上海に派遣になり、日本とは違う様々な環境に戸惑いながらも、逆にそうした環境だからこそ味わえる「やりがい」を感じながら3年間勤めることができた。その中でたくさんの学びがあったが、特に心に残っていること、教員として学んだことは在外教育施設における【学年経営】の難しさであった。今回は、このことについて報告したいと思う。

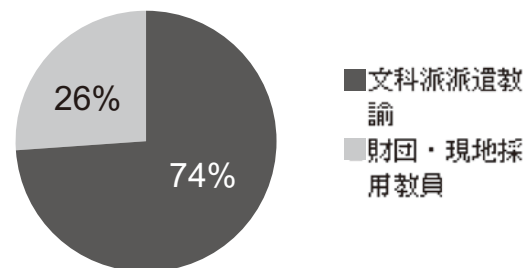
2. 子ども達と直接関わる教員

私が着任した上海日本人学校虹橋校は、1500人前後の児童を有する超大規模校であった。私が3年次となった平成23年度の場合、授業をもち児童と実際関わっていた日本人スタッフは以下の通りであった。まず学級担任は1学年9クラス、2学年9クラス、3学年8クラス、4学年7クラス、5学年7クラス、6学年5クラスの計47人。学級担任の他に音楽専科が4名、理科専科が4名、家庭科専科が2名、情報教育担当が1名、特別支援担当2名という大所帯であった。その中で「文科省派遣」の教員は35名（58%）、対して「財団派遣」「現地採用」という枠組みの教員が25名（42%）を占めていた。学級担任だけにこの割合をみると「文科省派遣教員」は35人（74%）、「財団派遣」「現地採用」の教員が12人（26%）であった。いわゆる担任外を務めた13名は全て「財団派遣」か「現地採用」教員ということになる。

現場スタッフの内訳



担任の内訳



3. 保護者の実態

在外ということで、母親が働いているケースは稀である。また、保護者は数年の期間で転勤する環境にあり、保護者同士の横のつながりは限られている。そのような中、共通項は「学校」であり、常に話題の中心にある。上海日本人学校虹橋校の場合、授業参観は土日に設定されていることもあり、保護者の出席率はほぼ100%とあってよい。参観当日は両親で訪れる家庭が少なくなく、教室に入りきれないほどである。放課後は、塾や習い事をしている児童がほとんどを占め、中学受験を予定している児童は連日遅くまで学習に取り組んでいる。こうした環境にあり、総じて保護者の教育への関心は高いといえる。

4. 学年経営の実際

私が主任を務めた5学年の場合、文部科学省派遣の担任が7クラス中6人、1人は現地採用枠で派遣されてきた教職経験半年の教員であった。5学年には専科として「音楽」「理科」「家庭科」担当が各1名割り振られたが、そのうち2人は教員経験が無く、残りの一人は上海にきてからの経験2年の教員であった。

学年主任として最も気を配ったのは、若い教員の指導力向上と学級経営状態の把握である。実際、私が赴任していた3年間に学級経営につまずき、大変苦勞をしている若い教員をみてきた。そうした状況になることは、学年経営全体にも支障をきたしかねない。上記したように、保護者は学校教育への関心が高く、子どものノートにしっかり目を通している。また自分の子のクラスだけでなく、他のクラスの様子にも関心をもってみている。教職経験の少ない若い教員にとっては厳しい環境といえる。

こうした実態を踏まえ、年度はじめに若手の教員を集め、児童を掌握するコツや学級経営の基本となるポイント、保護者の期待等について資料を提示しながら指導をした。また、初めの学年会において9人のスタッフに経営の指針を示し、学年全体でフォローしあっていくことの重要性を話した。また、在外における特殊な環境（転勤による地域教育力の脆弱さ等）や保護者の教育への関心の高さ（子どものノートをしっかり見ている等）などを再確認した。

実際に年度がスタートすると、毎日7時30分に行う職員室での簡単な学年打ち合わせ、毎週水曜日の放課後行われる学年会でそれぞれの学級の様子や学年全体の様子、事務連絡等を行い共通理解・共通実践に努めてきた。学年主任としては、空き時間を利用して授業時間内に学年巡視をしたり、休み時間等に他のクラスの児童に声をかけたりして実態把握に努めた。当然学年スタッフとの関わりも密に行い、信頼関係の構築に努めた。

こうした中、若い学級担任はもちろん、専科の担当も児童の掌握に苦勞する姿が多々見られた。日本では、そうした経験不足を地域が受け止め育ててくれるところがあるが、在外ではそうはいかない。即戦力が求められているのである。若い教員は毎日遅くまで教材研究に励んでいるのだが、児童を掌握していく力はある程度の経験が必要である。若い教員の授業を不定期に参観し、その都度指導をしていったり、児童への指導を直接の目的としてT2として授業に参加したりしてフォローに努めた。私一人ではなく、学年の学級担任も積極的に指導にあたってくれた。専科の教員に対しては、加えてそれぞれの専科主任からも授業の質向上のためのアドバイスを受れたり、教務部からの指導を受けたりして改善を図っていった。

このように、大規模な学校であり、なおかつ若い教員が多いという実態から、在外ならではのきめ細かい学年経営が求められたのであった。

5. おわりに

若い教員が多いことは決してマイナスばかりではない。彼らはいずれもやる気があり、毎日遅くまで教材研究に励んでいる。また、明るく学校を活気づけてくれる。そうした姿は我々を刺激してくれていた。

私が在外で求められたのは、学年主任として学年を束ねつつも、そうした若い教員の経験不足をどう補い、教員自体も育てていくことだった。日本ではなかなか味わうことのない貴重な体験であった。私自身まだまだ未熟でこれからまだまだ研鑽をつまなければならない立場であることは十分理解している。しかし、在外教育施設においてそうした姿勢だけでは、学年を、ひいては学校を作っていくことはできなかったと思う。積極的に自分の経験を伝えていくことが必要な環境であった。

大変貴重な体験を積むことができた3年間に、上海日本人学校で出会った教職員、児童、保護者に深く感謝している。